

---

# 星屑の戦艦II ~ 二人の戦争 ~

久保 徹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星屑の戦艦IEE二人の戦争

### 【Nコード】

N3645A

### 【作者名】

久保 徹

### 【あらすじ】

共通暦七一年、栄華を極め続けるかに思えた星系連合だったが、イエハン統合同盟との戦争状態に突入。幼馴染みのクロトとリンの二人は星系連合の軍人として戦争に参加していく

## 01 子供の分からぬところ

よく晴れた夜空

見上げると満天の星空が広がっている

しかし少年の目には美しく煌めく星達は映っていなかった

映っているのは星達の間を滑るように動く幾つもの輝点と何かが弾ける光

少年の祖先、移民船の船長の名を冠したこの惑星、《惑星アノン》の上空では宇宙艦隊同士の戦闘が行なわれているのだ

本来は二 万の市民を不安に陥れるはずその光景を、少年はうつとりと見つめるばかりだった

「クロト？ここにいたんだ」

「あ、リン」

少年、クロト・シニスタは複合住宅の屋上庭園から、この異常な夜空を見ていた

やってきたのはリン・ネフィール。クロト幼馴染みだ

「なにしてるの？」

「あれだよ」

クロトは夜空を指差した

今だに異常な夜空をリンも見上げた

「なんだろうね、あれ」

「パパ達はなんだか怖い顔してた」

「綺麗なのに」

子供の目には花火にでも見えているのか、しばらくそのままぼつと見上げていた

「二人とも、ここにいたのか」

聞き慣れた声に振り向くとクロトの父親が軽く息を切らしてやってきた

「お父さん」

「こんな時間に外に出ちゃダメだ。リンちゃんもお父さんとお母さんが探しているよ」

「パパとママが？」

「だから家に帰ろう」

そう言っ て胸元から携帯端末を取出しリンの父親達に二人を見つけたことを知らせた

すぐにリンの両親がやってくるだろう

クロトはその間も空を見上げていた。そして気になっていた疑問をぶつけてみることにした

「ねえ、お父さん」

「ん？」

「あれは何をやってるの？」

クロトは夜空を指差して聞いた

途端に父親の表情は明らかに曇った

「あれは、大人達のくだらない意地の張り合いだよ」

「どうゆうこと？」

「子供には難しいことなんだ」

特に特徴もない平凡な星に住む平凡な少年には、雲の遙か上空で行なわれている戦闘がまるで別世界のことのように思えた

翌日、惑星アノン唯一の放送局は一晩中続いた戦闘の結果を伝えた

「標準時間の昨夜から明朝にかけて衛星軌道周辺で続いた戦闘は、両軍に多大な損害を残し星系連合軍が辛うじて防衛に成功しました」

発足以来、銀河の大半を支配し栄華を極めたかに見えた星系連合だったが、惑星イエハンの登場によってその絶対的な力が揺らぎ始めていた

時に共通暦七 年 クロト・シニスタ、リン・ネフィール共に十歳

## 02 迎え人

共通暦七 七年、惑星イエハンと星系連合との戦いは未だに続いてきた

当初圧倒的に不利だったイエハンは、周辺星系に連合からの脱退及びイエハンとの同盟を呼びかけた

「我がイエハンに亡命してきた連合惑星の市民によれば、各惑星の自治権は保障し市民の生活は今までと変わらないと言っていた連合の言葉は全てが虚偽であり、実際は軍を降ろし武力によって市民を支配しているという！」

もちろんこれはイエハン側による策略であり、連合側は強く反発した

「今は静かでもそのうち大艦隊を引き連れて武力支配を強行するのは明らかだ！」

だが実際は連合の傘下に入ったばかりで浮き足立っている星系政府にはかなりの影響力で、イエハンの呼びかけに答え連合から脱退する星系が相次ぎ、そのほとんどがイエハンと同盟した

こうして瞬く間にイエハンを中心とする反星系連合は勢力を拡大し、イエハン統合同盟 を結成し同時に星系連合に対して宣戦布告した

現在、共通暦七一年

惑星ファブリスは開拓以来連合軍の軍施設が多く作られ、住民の三分の一は軍人である

一般住民と軍人の居住地域はしっかりと区別され、それぞれの地域の中で全てが賄えるように店舗が作られている

そんな軍人地域の中央には宇宙港への昇降機がそびえ立ち、一度に一人近い人間を空に上げている

クロトは今まさにその昇降機に乗り込もうとしている

三年前、軍学校に入るためにこの星にやってきた時は初めての宇宙を経験したあとだったので妙に興奮していたのを覚えている

だが今回は違っていた

「き、緊張するなあ」

軍学校をなんとか無事に卒業したクロトは今から配属先の戦艦に向かおうとしているのだ

宇宙港から戻ってきた昇降機が到着しクロトも乗り込んだ

扉が閉まり昇降中を示す赤ランプが点灯する

昇降機はものすごいスピードで上っているはずだが、重力制御さ  
れているため振動は全く感じない

「まもなくファブリス宇宙港に到着します」

乗り込んでから数十秒、アナウンスが入った。そして数秒後到着、  
扉が開く

途端に宇宙港の喧騒が耳に飛び込んでくる

宇宙港には一般住民地域からも昇降機が伸びており、広いロビー  
には軍人と一般住民でごった返している

人々は辺りを動き回る自走販売機から食べ物や飲み物を買ひ、置  
かれている椅子やテーブルで時間を潰す

クロトも自走販売機から飲み物を買ひ、近くの椅子に腰を下ろした

「ふーっ」

たいして疲れていないのに深い息を吐いたのは緊張のためか、ク  
ロトはドリンクを飲んで気持ちを落ち着ける

窓の外を見ると一般住民用の星系間旅客船と一緒に、何倍もの大  
きさの連絡艇が並んでいる

連絡艇は高戦艦や熾滅艦などは大きすぎて直接宇宙港に入れない

そこで連絡艇で物資や人を運ぶのだ

クロトも連絡艇に乗って配属先の戦艦まで行くことになる

しばらくすると宇宙港に一隻の連絡艇が港に入ってきた

「時間的に、あれかな？」

すると搭乗口から見覚えのある人物が出てきた

「あれって、もしかして……」

グレーの軍服を着たその人物は真つすぐクロトを目指してくる

女性のようだ。彼女はクロトの前で立ち止まった

クロトもとっさに立ち上がる

彼女は表情を変えずにクロトを見据え、敬礼をして

「クロト・シニスタ十揮長ですか？」

「は、はい。そうです」

クロトは彼女の迫力にたじろいだ

彼女はそんなクロトはお構いなしに続ける

「ラトレーニ高戦艦から迎えに参りました。私はリン・ネフィール十揮長です」

「リン!？」

もしかしたらと思っていても本人の口から直接聞くと驚いてしまう

そんなクロトを見てリンはうつむいてしまった

「リ、リン？」

何かまずいことを言ったかと心配になったが、それが無駄な心配だったとすぐにわかった

リンの体が小刻みに震え、時折小さく吹き出している

「もう……だめ」

リンは顔を上げた途端堰を切ったように笑いだした

突然のことにクロトは呆気にとられている

「ごめんごめん。まさか、そんなに驚くとは、思わなくて」

リンは笑いすぎて言葉が続かなくなっている

「だ、大丈夫か？」

「あー、お腹痛い」

笑いがおさまると一度深呼吸をして話を続ける

「まあ無事に会えてよかったね」

「まさかリンが来るとは思わなかったよ」

「私だって今回来るのがクロトだって聞いたときはびっくりしたん

だから「

こうしてクロトとリンの三年振りの再会は無事に終了した

再会の挨拶もそこそこに二人は《ラトレーニ》に向かって歩きだした

つもる話しもあつたが焦る必要はない

これからの《ラトレーニ》での生活でそんな時間はいくらでもあ  
るのだから

### 03 再会も束の間

ファブリスの宇宙港で二人が再会を果たしていた頃、《ラトレーニ》には緊急通信が入っていた

「第七艦隊から応援要請。このままではゴウラ防衛線突破されます」

「第一 四八戦隊から一八 戦隊は至急第七艦隊と合流。残りは周辺警戒を継続」

《ラトレーニ》の艦橋に艦隊旗艦からの指示を伝える通信士の声が響いている

他の艦橋要員達も慌ただしく動き始め、艦橋は緊張感が高まってきた

「こんな所まで押し込まれるとは思わなかったわ」

《ラトレーニ》艦長、ファン・ハスイ准尉十揮長は艦長席で床の宇宙図を見ている

椅子をゆっくり叩く指が多少の苛立ちを感じさせる

「第七艦隊は総数の四割を喪失か……ひどいわね」

宇宙図の青い輝点は戦闘開始時よりだいぶ後ろに下がってしまっている

「合流するまで保ちますかね？」

副長兼主任砲術士のスメリア十揮長が言った

「普通に考えれば保つでしょうね」

ファンはそう言つと濃紺の髪を揺らして立ち上がった

「シンティア、出航準備急いで」

「はい」

シンティア主任技術士は短く答えながらも手は休むことなく動いている

「スメリア、リンは？」

「もう呼び出しました」

「そう、ありがとう」

「うそつ、応援要請!？」

突然リンが声をあげた

《ラトレーニ》からの連絡がリンの携帯端末に届いたのだ

この時二人は搭乗通路に入ろうとしているところだった

「どつした？」

後ろを歩いていたクロトはそれを見てリンの携帯端末を覗き込む

「第七艦隊から応援要請あり、至急艦へ戻れ……え、もう出るの？」

「そう！急いで！」

リンはクロトの手を取って駆け出した

扉を抜けて《ラトレーニ》までの無重力通路を飛び、艦内に入るとファンの声で放送が流れた

「全乗組員へ。本艦はこれより第七艦隊の応援要請によりゴウラ防衛線へ向かう」

その間にも二人の前を乗組員達が慌ただしく横切っていく

「僕たちはどうすれば？」

「とにかく艦橋に行こう」

二人の兵科は計務科と偵察科で、艦の出航時には技術科ほど忙しくない

それでも艦橋要員の一人なので、急ぎ艦橋へ向かった

「艦長！」

「リン、お疲れさま」

二人が艦橋に入ると出航準備はほぼ完了していた

「あなたがクロト・シニスタ十揮長？」

「あ、はい。初めまして」

クロトは軽く頭を下げた

「本来ならあなた達には練習航行をしてもらっただけど」

「わかっています。今はそれどころじゃないですから」

リンが先回りして答えた

「そうよ。悪いけどあなた達にはぶっつけでやっもらっわ。出来るわね？」

「はい、出来ます」

クロトが答えた。リンも隣でうなづく

「よろしい、ならお願いね」

「艦長、出航準備完了しました」

スメリアから報告があつた

「出航する、副機開始動」

「了解、副機開始動」

ファンの命令とともに艦体が港からゆっくりと離れていく

艦体側面から短い噴射を繰り返し進むべき方向へ頭を向ける

重力制御機関が働き振動はないが、艦橋の壁面に映し出されている星空が大きくふれ、巨艦が動いていることを示す

「姿勢制御完了」

「主機関始動、出航！」

今度は少し振動があった

燃料が対消滅機関に流れ込み、そこから生まれたエネルギーが艦を蹴りだす

宇宙図に光る青い輝点が次々と同じ方向へ動いていく

その先にあるのはファブリス星系門

門を越えたその先に灼熱の戦場が待っている

## 04 初陣

星系連合軍の艦隊は三つの艦種で構成されている

多くの反陽子砲と機動爆雷で武装し攻撃に特化した《熾滅艦》

強力な電磁防御壁を持ち文字通り艦隊の壁となる《護衛艦》

三種中、最も数多く建造され戦闘の主力である《高速戦闘艦》

イエハン統合同盟との戦争が長引きはじめた時、星系連合軍は新たな艦種の開発に着手した

それが熾滅艦から機動爆雷を取り除き、一回り小さくした第四の艦種《強襲艦》である

そして練習航行を終えたばかりの強襲艦部隊も第七艦隊のもとに向かっていた

「まもなく通常宇宙に出ます」

リンが報告した

「なんか前に知らない部隊がいるみたいだけど」

クロトが宇宙図を見ながら言った

ゴウラ星系門の外に見慣れない番号の部隊が先行している

目的地は同じようだ

「それは強襲艦ね」

ファンが答えた

「強襲艦、ですか？」

「最近出来た新しい艦種ね。簡単に言えば殲滅艦が小さくなった感じよ」

「へえー」

「ゴウラ星系門通過、通常宇宙に出ました」

リンの声が艦橋に響くと同時に景色が灰色から黒に変わった

ここはもうゴウラ防衛線の目前である

「第七艦隊は？」

「現在も敵艦隊と交戦中です」

「第七艦隊に連絡を」

第七艦隊にこちらの所属を伝えると、すぐさま返信がきた

「さあみんな始めるわよ」

《ラトレーニ》と他五隻の第一七九 戦隊は指示された宙域へ急行する

そのすぐ近くでは先程の強襲艦部隊がすでに戦闘を開始していた

「敵部隊を捕捉しました」

「総員戦闘準備。スメリア、お待たせ」

ファンは艦長席からスメリアを見下ろして言った

砲術士は戦闘時以外はあまり仕事はなく、時間を持て余していた

「大丈夫ですよ艦長。いつでもいけます」

「よろしい」

ファンはうなずいた

ほぼ同時に敵もこちらを捕捉したらしい

赤い輝点の集団から別れた六つの輝点が迫ってくる

第一七九 戦隊全艦は戦闘準備を完了し迎え撃つ

「有効射程まで五分」

ここから艦橋は沈黙に包まれ、リンの秒読みが進むにつれて緊張感も高まっていく

(いよいよ実戦か)

クロトの額にはうっすらと汗がにじみ、それを無意識に拭っていた  
ふと横をみる

リンも緊張した表情で淡々と読み上げている

「一分」

肉眼でも敵部隊がはっきり見えるようになってきた

六つの光はほぼ横一線で近づく

「十秒前……三、二、一」

「攻撃開始！」

同時に可動砲と反陽子砲が一斉に放たれた

敵部隊の内一隻がプラズマとなって四散し消滅した

敵も負けじと撃ち返してくる

ファンは頭環の映像に集中する

敵の放った反陽子が迫る。艦を素早く横滑りさせて回避した

そのまま撃ち合いながらすれ違い、すぐさま艦を回頭させる

再び反陽子砲を放つ

敵艦に直撃、ほとんどが電磁防御壁に弾かれたが全ては防ぎきれず小さな爆発が起きた

「浅いか」

ファンは唇を噛み締めた

しかし敵艦は誘爆を続けついにはプラズマと化した

「よし」

残る敵艦は四隻

その四隻も瞬く間に撃破されていった

「こちらの被害は？」

「一番と六番が損傷、離脱しました」

「本艦は損傷なし」

「艦内環境も良好です」

「ご苦労さま、生き残ったわね」

周辺に敵はいない

宇宙図を見ても各宙域で連合軍は同盟軍を押し返し、戦局は逆転

した

こうしてリンとクロトの初陣は無事に終わった

「なんとかあったね」

「うん」

二人はクロトの部屋で飲み物を片手にほっと一息ついていた

クロトは紅茶、リンは林檎茶だ

「リンはどうだった？」

「んー」

リンは少し考えてから

「やっぱり恐かったかな」

林檎茶の水面を見ながら言った

「よかった、一緒だね」

クロトは小さく笑った

「自分だけだったらどうしようかと」

「あそこで恐くない人なんかいないでしょう」

「それもそうか」

クロトは肩をすくめた

「私は自分のことで手一杯で恐怖を感じる暇もなかった」

「他の三人も必死だったね」

「あの三人は戦闘中は特に忙しいから」

その後もしばらく話していた二人はファンに呼び出されて艦橋に向かった

「艦長、お呼びでしょうか」

二人が艦橋に入った時ファンは退屈そうに椅子にもたれていた

「悪いわね、急に呼び出して」

「いえ、お話は？」

「話してないのはあなた達だけなんだけど、軍が再編されることになったわ」

同盟軍との戦争が始まり各地で激戦が続く中で連合軍は多くの兵と艦を失っていた

「今艦隊は穴だらけなのよ。そこを攻められれば第七艦隊の二の舞になってしまう」

再編成はその穴を埋めるために行なわれる

「で、再編成なんだけど……ねえリン」

「はい？」

「あなた、艦長の適性試験受けてるでしょ」

「え、そうなの？」

今まで黙っていたクロトが驚いて言った

「うん」

「でも艦長は准尉十輝長からだし」

「一年経てば昇進試験もある。適性試験の結果だいぶよかったみたいだし、あなたならなれると思うわ」

「ありがとうございます」

その後艦隊は再編成された

人員は全員一度所属を解かれ、強襲艦を含めた新たな艦隊に配属されていた

## 05 艦長就任

一年後、第六艦隊強襲艦<sup>サルーテ</sup>

「リン・ネフィール十輝長、準備はいいか？」

頭環の中に男が現われた

「はい」

リンが答えると男は

「では始める」  
と言って消えた

リンは目を閉じ集中する

余計な考えを排除し、目の前の敵を倒すことだけを考える

「それでは練習航行最終過程、模擬戦闘始め」

「機関最大！」

合図と同時にリンが叫ぶ

「了解、機関最大」

艦橋の一番前に陣取っている主任技術士のデューイが復唱する

《サル―テ》は艦尾から光を伸ばしながら敵に突撃していく

敵も《サル―テ》をめがけて向かってくる

高速の両艦はあつと言う間に互いを有効射程に捉えた

「可動砲、全門撃て！」

主任砲術士のミアアが可動砲を操作して攻撃を開始した

だが非力な可動砲のみでは高戦艦すら撃破できない

可動砲のエネルギーは防御壁に弾かれて消えた

だがミアアの苛烈な攻撃に敵艦の動きは鈍くなる

すかさずリンが《サル―テ》の艦首を敵艦に向け、反陽子砲の一撃を叩き込む

ミアアの攻撃で防御壁が弱まっていた敵艦は、反陽子の奔流に包まれ四散した

勝負は一瞬だった

「お疲れさまです」

敵艦が消えると頭環の中に今度は女が現われた  
先程の男とは違い穏やかな笑顔だ

「頭環は取ってもいいですよ」

リンは言われた通り頭環を外した

「ふう」

小さく息を吐いた

実際の戦闘時間は数分だったが予想以上に疲れている

「お疲れさま」

艦橋の前面に同じ顔が現われた

彼女は第六艦隊のルクロア・ノイン提督

「さすがね、リン十輝長」

「ありがとうございます、ルクロア提督」

ルクロアの言葉にリンは座ったままで軽く頭を下げる

「たった一年でここまで成長したなんて正直驚きだわ。ま、とにかくこれでは誰がなんと**強襲艦**の艦長よサルーテ」

（たった……かあ）

確かに一年は短い

リン自身も初陣以来何度も戦闘を経験してきたが、その経験は全てが初体験であり短い一年は中身の濃いものだった

「疲れてるだろうから今日はこのくらいで」

ルクロアは軽く敬礼して消えた

リンも敬礼して答える

「すごいじゃないですか艦長。あの提督が誉めてましたよ」

デューイが振り向いて言った

「うん。私も少し驚いたよ」

先程までとは違って変わって艦橋の緊張感はとけた

「みんなのおかげだよ」

リンはミリアの方を見て

「一番のお手柄はミリアね」

「いえ」

ミリアはまだ端末を操作し何かしている

「命中率五割、実戦では低すぎます」

どうやら模擬戦闘の分析をしているようだ

画面にはグラフや数字が次々表示されている

「自分とはとにかく早く風呂にでも入りたいです」

「そうね。じゃあ二人ともお疲れさま」

リンが立ち上がると二人も立ち上がり敬礼をする

リンも敬礼を返して二人が艦橋を出るのを見送って自分も出ていった

自室に向かって廊下を歩いていると、前方の部屋の扉が開いた

「やあ」

「クロト、何してるの？」

「することなくて部屋で教本を見てたんだ」

クロトは頭をかいた

「勉強とはめずらしい」

「光栄にも艦長候補様に指名されたからね。仕事が増えたんだ」

クロトが笑顔で意地悪く言う

「さっき艦長になったの」

リンは少し不愉快そうに言った

「それは失礼しました」

クロトは肩をすくめ

「計務科に加えて偵察科も掛け持ちだからね」

強襲艦の艦橋要員は高戦艦よりも一人少ない四人

計務科と偵察科を一人が担当する

「リンは？」

「部屋に戻って休もうかと」

「じゃあ邪魔しちゃ悪いね。ごゆっくり」

クロトは部屋に戻った

リンもすぐ近くの自室に入り、照明を消しベッドに横になった

どのくらい時間がたっただろうか

突然枕元の小さな照明が点き、壁の画面にクロトが現われた

「艦長」

リンはすぐに目を覚まし画面に目をやった

「なに？」

「ルクロア提督から通信です。すぐに艦橋に来てください」

「わかった」

飛び起き軍服の上着を着て、さらに艦長用の長衣を羽織る

そして足早に艦橋へ向かい、寝乱れた髪を手櫛で整えた

「ルクロア提督、お待たせしました」

「いえ、休んでたのに悪いわね」

「何かあつたんですか？」

ルクロアの表情が陰しくなる

「練習航行を終えたあなた達は、連合軍の戦力として数えられるようになった、ということよ」

「戦闘ですか？」

「そうよ。それも大規模な会戦になりそう」

イエハン統合同盟との戦争が始まってから艦隊同士の大規模戦闘、会戦は何度かあった

両軍合わせて一八 隻余りの艦艇が激突する

「戦闘開始は概算で五時間後、敵の数はこちらより少ないけど油断しないで準備よろしく」

「わかりました」

通信を切りルクロアの映像が消えると、リンはしばらく視線を動

かさなかつた

「艦長就任後の初戦闘が会戦とは、我々はツいてるんですかね」  
デューイがうつすら笑みを浮かべながら言った  
まるで会戦を経験できる自分の運の良さを、迷惑がっているようにも聞こえる

「ある意味ね」

「勝率は六割以下」

敵艦が新鋭か旧型か、乗組員の錬度、その他不確定要素を考慮してミリアが計算した

「ようするにわからないってことか」

クロトは溜め息をついた

「四時間後、生き残りたかつたらちゃんと準備して」

リンに促されて三人はそれぞれ作業を始めた

そして四時間後には第六艦隊が担当するイリーシュ門付近の宇宙  
図は、おびただしい数の輝点で埋め尽くされていた

## 06 イリーシュ門会戦1

「敵艦隊に変化なし。有効射程まで三分」

ルクロアが搭乗している第六艦隊の旗艦、アイルケラン殲滅艦の艦橋に偵察士の声が響く

それを聞きつつルクロアは床の宇宙図に目をやる

敵艦隊は今も尚接近し続け、輝点の密集率はますます高くなる

「ほんと、すごい数」

ルクロアは静かにつぶやいた

しかし独り言のつもりだったその言葉を聞いていた人物がいた

「提督、恐いんですか？」

「あらエクレール、盗み聞きとは良い趣味ね」

ルクロアの金色の瞳が横に流れる

そこに立っているのは長身で赤目の男、第六艦隊参謀のエクレール千揮長だ

「すみません、聞こえてしまったもので」

エクレールは小さく笑みを浮かべながら言った  
だがその言葉にあまり誠意は感じられない

「別にいいけどね」

ルクロアも、聞かれて困ることでもないので特に咎めようとはしない

「ところで参謀、隊列案はできてるかしら？」

「はい」

宇宙図が消え仮想隊列が表示される

戦闘において多くの場合、熾滅艦の機動爆雷が開戦の狼煙となる

艦隊戦となればその割合はさらに高くなり、まずは敵の機動爆雷を防ぐ必要がある

よって隊列の先頭は護衛艦部隊、彼らが盾となる

次に熾滅艦部隊は、弓となり爆雷を放つ

そして最後に高戦艦と強襲艦の打撃部隊が、その鋭い槍で敵に止めを刺す

基本的な隊列であるが正面からのぶつかり合いでは有効だ

「いいでしょう、ただちに組み替えて」

「わかりました」

《アールグラン》からの指令は情報連結を通じて全艦に伝えられた

「予定時刻まで十分」

クロトが報告する

この時は指示された隊列につき、時間<sup>サルーテ</sup>がくるのを待っていた

今の艦の操舵は自動、することはない

リンはクロトが用意した紅茶をすすりながら、じつと正面を見据えている

(すごい数……)

艦外カメラの映像には、敵艦隊の推進光がはっきりと映っている

「紅茶、おいしい？」

するとふいにクロトが話し掛けてきた

「え？あ、うん」

「それはよかった。ちょっと砂糖を追加したんだ」

「いつもより甘いと思ったんだ。うん、おいしいよ」

クロトはにっこり笑った

「では艦長、五分前です」

そしてすぐにその蒼い目に真剣さを取り戻す

「うん」

リンも紅茶を置き操縦桿を握った

(あ……)

その時リンはあることに気付いた

さっきまであった恐怖や緊張が、嘘のように消えていたのだ

(まさかそのために?)

クロトの方に視線を移す

そして心の中で感謝して、再び前方に視線を戻し自動航行を解除した

そして

「敵艦隊より爆雷とおぼしき熱源接近！」

アールグラン  
旗艦の偵察士が叫ぶ

「来たわね」

ルクロアはさっと立ち上がり

「爆雷戦、開始！」

《アールグラン》から機動爆雷が放たれた

それを合図に殲滅艦部隊が一斉に爆雷戦を開始する

放たれた爆雷は護衛艦部隊の間をすり抜け、一直線に突撃していく

目標は迫り来る敵の爆雷群

敵の爆雷達は、自らを捕えようとする爆雷を突破しようとする試みる

しかし彼らは追い込まれ、行く手を遮られ、その多くが仕事を果たせず消えていった

しかしすべての爆雷が迎撃できたわけではない  
包囲を抜けた爆雷はさらに突撃を続ける

「護衛艦部隊、迎撃開始！」

多数の可動砲が休みなく働き、爆雷を破壊していく

中には弾幕をかいくぐり仕事を果たしたのもあったが、大半は  
撃ち落とされた

「敵先頭集団、射程に入りました」

「ここからが本番よ。全艦前進」

爆雷戦が終わりに差し掛かると、ルクロアの命令で第六艦隊は敵艦隊に向けて進み始めた

「爆雷の目標を敵艦隊中心に変更して」

ルクロアは参謀に言った

エクレールはすぐに対応する

「変更しました」

「じゃあ始めましょ。ありったけの爆雷を」

新たに放たれた爆雷達は、敵の同族などには目もくれず後方で達観している敵の中心部へ向かっていく

その後ろを第六艦隊が追隨する

「爆雷群、敵艦隊と接触しました。接触範囲拡大中」

偵察士が告げる

敵艦隊の中央に飛び込んだ爆雷は、我先にと敵艦に体当たりしていく

「敵先頭集団、接近」

「あら、彼らはあんな数でまだやる気なのかしら」

ルクロアは驚いたふりをする

向かってくる先頭集団は、すでに当初の半数以下になっている

「どうしますか？」

「撤退するなら見逃してもよかったけど」

ルクロアは立ち上がり

「向かってくるなら、徹底殲滅よ」

横に広がった先頭集団に対し殲滅艦が一斉に反陽子砲を浴びせる

敵艦はたいした反撃もできないまま次々と爆散していく

「先頭集団、消滅しました」

それを聞いて、ルクロアは立ったままで笑みを浮かべた

「どつやら敵の指揮官はマヌケなのね」

「そうでしょうか」

エクレールが聞くと

「しらんなさい」

ルクロアは宇宙図を表示させ、敵の中心部を拡大した

「あちらは爆雷の対処で手一杯、先頭を見殺したも同然よ。爆雷の必要数を見誤ったのね」

拡大された中心部は混乱し、爆雷と敵艦の舞踏会場と化していた

「じゃあそろそろ仕上げといきましょう」

勝利を確信したような表情でエクレールに指示をだす

「打撃部隊、攻撃開始よ」

## 07 イリーシュ門会戦2

熾滅艦から放たれた爆雷達が敵の中心部を掻き回していた頃、命令を待つ《サルーテ》では

「艦長、おれ達に出番あるんですかね？」

「どつだろっ」

デューイの問いにリンは首をかしげて答えた

「敵艦隊の残存率、五割です」

「ないかもね」

ミリアの報告を聞いてリンは訂正した

事実、宇宙図に表示されている赤い輝点は次々と消えている

その時から通信アールゲランが入る

「提督はなんて？」

「熾滅せよ、以上です」

「なるほど、わかりやすい」

外を見ると味方の部隊が続々と動きだしている

「私たちも行こう」

彼らに続いて《サルーテ》も発進する

前方には護衛艦の巨大な後ろ姿が近づいている

僅かに進路を変更し護衛艦の横をかすめるように飛ぶ

機動力の低い護衛艦はあっという間に後方へ去った

「敵艦隊から高戦艦級、多数接近」

敵も迎撃部隊を出してきた

両軍は瞬く間に交戦状態に入った

「前方から敵艦！」

クロトが叫ぶ

敵艦は単艦でまっすぐ《サルーテ》に向かってくる

先手は敵艦、《サルーテ》を反陽子砲が襲う

リンは高い反射神経でこれを躲し、反撃に転じる

すれ違いざまに可動砲と反陽子砲を一斉に叩き込んだ

敵艦に直撃し四散する

だが一安心する間もなくさらに強力な敵が迫っていた

「熾滅艦級、接近！狙われてます！」

クロトの緊迫した声

敵艦の頭はすでにこちらを向いていた

《サル―テ》は目の前を横切るいい獲物のようなものだ

そして核融合弾が放たれた、三発だ

「ミリア！」

四基の可動砲が向きを変え盛大に火を吹く

二発はなんとか破壊したが、残りの一発が飛んでくる

「くっ………！」

迫る死の恐怖に、冷たい汗が流れ体が固まる

だが電磁防御壁に触れる前になんとか破壊に成功した

同時に爆風の衝撃が《サル―テ》を揺らす

「被害は!?!」

「第四区画に破孔！大丈夫、あそこはただの倉庫です。隔壁閉鎖します」

クロトのほつとした表情とは逆に、デューイは悲痛な表情だ

「大丈夫なもんか！あのそこには交換部品があるんだぞ」

「補給すればいいじゃないですか」

「まだ一度も使ってないんだ、もったいないだろう」

なんでもないことを話して恐怖を忘れようとしているのか  
と  
リンは思った

「敵熾滅艦級、なおも本艦を指向」

ミリアの声が艦橋に緊張感を甦らせる

熾滅艦相手に強襲艦一隻では、人間が蚊を叩くようなもの

「《サルーテ》！生きてる！？」

ルクロアの声だ

「今、援軍を送ったわ！それまで踏張りなさい！」

その間も熾滅艦は、《サルーテ》や周囲の連合軍艦に向けて攻撃  
を続ける

《サルーテ》も反撃し防御壁の破壊を試みる

ほどなくして援軍として一個戦隊、強襲艦六隻が合流した

これによって立場は逆転する

「まるでなぶり殺しだ」

七隻の強襲艦は敵艦の周囲を周りながら、代わる代わる反陽子砲を浴びせ続ける

敵艦の反撃の成果は七隻のうち一隻におわり、防御壁は崩壊し姿勢を変えるのもままならないようだ

「熾滅艦相手じゃ強襲艦も非力なのよ」

ミアリアが静かに言った

そして反陽子の一閃が敵艦を引き裂き、宇宙に巨大な残骸をさらした

「さ、まだ終わってないんだから油断しないで」

「状況を教えて」

「戦況は我が軍に優勢。戦力比七：三」

「いい感じね」

偵察士の報告を聞いてルクロアは満足そうだ

艦長席で腕を組んでみせる

「提督」

隣にエクレールがやってきた

「なに？」

「今後の展開ですが」

エクレールは交戦域周辺の宇宙図を表示させた  
交戦中を示す紫の輝点で埋め尽くされている

「このままだと打撃部隊が敵の殲滅艦部隊とぶつかります。数は勝  
つていても相手が相手なので、かなりの被害が出ると思われます」

宇宙図の端にこのまま進軍した場合の予想被害率が出された

けして快勝とは言えない被害になりそうだ

「やっぱりそうよね」

ルクロアも同意見のようだ

「艦隊の残った爆雷を使えば、率は格段に下がります」

先程の被害率の場所が新たな予想結果に変わった

「決まりね。全艦通達」

「わかりました」

エクレールはそれを偵察士に伝え、すぐさま全部隊に発信された

「《アールグラン》より通信。交戦中の全部隊は速やかに退避せよ」  
クロトが伝える

「え？退避？」

リンはショックにも似た驚きを見せる

それもそのはず、もうすぐ敵殲滅艦の二隻目を撃破できそうなのだ  
「どうやら機動爆雷で一気に終わらせるようです」

リンはルクロアの考えを理解したが、同時に悔しくもあった  
強襲艦の新人艦長で殲滅艦を二隻撃破するということはかなりの  
自慢になる

仕方ないか死んでは意味がない

「退避する」

リンは《サルーテ》を急旋回させ、敵艦から離れていく

突然の退避に驚いたのか、敵は追撃してはこない

宇宙図の紫の輝点が、赤と青の輝点に分かれていく

前からは黄色い輝点、止めの爆雷達が赤い輝点に向かっていく

一瞬のうちに交差してあっという間に後方に飛んでいく

「接触まで十秒、九……八……七……」

クロトが秒読みを始めた

「四……三……二……一……」

直後、宇宙図の赤い輝点は一斉に慌ただしく動きだし、開戦直後の舞踏会が開かれた

クロトとリンにとっての初の会戦は、星系連合軍の勝利で幕を閉じた

戦場にあるのは味方が降伏したものばかり

「降伏した捕虜は輸送艦に乗せて。いじめちゃダメよ」

「はい」

「じゃあ、全艦に集結命令を出して」

ルクロアは戦後命令を一通り出し終わると、艦長席に寄り掛かり小さく息を吐いた

「なんとか勝てたわね」

「そうですね」

「ああそうそう」

ルクロアは思い出したように

「一番働きが悪かったのは？」

「みんなよく働いたと思いますが……」

「別に怒るわけじゃないのよ。いいから評価して」

「そうですね……」

エクレールは各戦隊の撃破率を見比べて

「強いて言うなら、一六二から一六三戦隊が低いですね」

「じゃあ彼らに後始末させて」

「わかりました」

「さて、お風呂お風呂」

ルクロアは上機嫌で艦橋をあとにした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3645a/>

---

星屑の戦艦II～二人の戦争～

2010年10月10日06時09分発行